

## 年間第 30 主日 マタイ 22 : 34~40 隣人を自分のように愛せよ

イエス様は、伝統的なユダヤ教の祈りを毎日していました。日の出前、午後 3 時、日没後の 3 つの時刻がユダヤ人の祈りの時間でした。今日の福音で最初にイエス様が語っている第 1 の掟は、「シエマ（聴け）イスラエル」で始める祈りから来ているでしょう。唯一の神への信仰告白をした後すぐに、「全力を尽くしてこの神を愛すべきである」と唱えていました。「子供たちにも、寝ているときも、起きているときも、これを語り聞かせなさい。」（申命記 6 : 6~7）とあるように、一日の何度もシエマの信仰告白を唱えていました。第 1 の掟は、ユダヤ人なら当然のことでした。

イエス様の独自性は、唯一の神を身近に感じていたことです。祈る時は「アッバ、父よ」アラム語で「お父ちゃん！」と親しみを込めて呼びました。そして「父なる神の国」への強い思いがありました。イエス様は「み国」「神の国」という言葉を共観福音書の中で 90 回以上使っています。イエス様の心は「神の国」の実現のためにいつも燃えていました。習慣や決まり事として「唯一の神を愛しなさい」と唱えるのではなく、心からの「み国」への思いに突き動かされました。

第 2 の掟は「隣人を自分のように愛しなさい」です。この第 2 の掟には、2 つ課題があるように思います。1 つ目は、「誰が隣人なのか？」 2 つ目は「自分のように愛するとはどういうことなのか？」です。

1 つ目の「隣人とは誰か？」についてファリサイ派たちは、律法を守っているイスラエルの同胞と考えていました。これに対して、「よきサマリア人」のたとえにあるように、イエス様は、「困っている人は誰でも隣人」と語っています。「見知らぬ人でも、困っていたら素通りせず、できる限りの奉仕をしなさい」と言われます。

課題の 2 つ目「自分のように人を愛するとはどういうことでしょうか？」 できる限り隣人に親切をしていても「自分のことを愛せてない」ことがあります。

「自分は役に立ってないんじゃないか？」「周りから歓迎されてるだろうか？」「頑張ってきた実りはあるのだろうか？ 徒労に終わってるんじゃないか？」「人手不足であれもこれもしてるけど、本当にこれでいいのだろうか？」 こんな思いを引きずっています。

ある本にこうありました。「わたしは、2~3 年前に亡くなった友人の神父さんが、がんで苦しんでいた時にイエス様にこう言っていたのを思い出します。『ああ主イエスよ。わたしはあなたの宝です。』 がんで苦しむ神父さんは「あなたはわたしの宝」とは言わないで「わたしがあなたの宝だ」と言っていました。神父さんは、神様からどれだけ大切にされているかを悟っていました。神様から丸ごと愛されていることを感じていました。見舞いに来る人は、神父さんを愛している神様を感じて、自分も神様から大切にされていることを感じたでしょう。

私たちは、もうこれ以上できないほど頑張っていますが、そんな自分をなかなか受け入れません。「私はあなたの宝です」となかなか思えません。思えていない自分に「あなたは、神様の宝です」とは言えないものです。どうしたら、「わたしはあなたの宝です」と言えるのでしょうか？

きっと、仕事を離れて、神様との時間を取ること。神様の前で座る時間を取ることがスタートでしょう。いつも頑張っているわたしに「あなたはわたしのために本当に良くされてる」とねぎらってくださいでしょう。「疲れた者、重荷を負う者はわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」

（マタイ 11 : 28） 神様からのねぎらいの言葉をもらって、神様から大切にされていることを感じましょう。そして、「あなたも神様の宝です」と人々に伝えていきましょう。